

## 食品ロスを減らすために

### 静岡市内中学校

#### 山下さん

私は食べることが大好きだ。好きというより、お腹が減ってしまうのかもしれない。今日もいつものように、三時間目から給食が待ち遠しかった。ご飯を多く入れてもらい、野菜も増やした。けれど、牛乳は飲まなかった。別に大した理由がある訳でもないのに、たまに牛乳がいくつも余っていて、「この牛乳はどうなるのだろう、全て、捨てられてしまうのかな。」などと思う。この日は牛乳、ご飯もたくさん余っていた。とてももったいない気がして、「減らさなくても良かったのに。」と後で後悔した。

学校の給食では、毎日多くの食品ロスが出ている。食品ロスとは、食べられるのに捨ててしまう食品のことを指し、日本では年間約六百万トンもの食品ロスが出ているそうだ。これは、世界の飢餓に苦しむ人々に向けた食糧援助量、約三百二十万トンを上回る。

こんな日本の食品ロスの大きな原因の一つが、学校の給食だ。給食の食品ロスは、年間で児童一人あたり、約十七キログラムと言われている。では、なぜ給食でこんなに多くの食品ロスが出ているのだろうか。なぜ食べ残してしまうのだろうか。

私は、給食の食べ残しの理由が四つあると考える。一つ目は、個人によって食べる量が違うということだ。私の学校ではいつもご飯やパンなどの、主食が残ってしまう。これは、多く食べられる人もいれば、あまり食べられない人もいるからではないか。小食の人がみんなと同じ普通の量を食べるのは、無理だと私は思う。無理して食べても良いこととは言えない。また、炭水化物を控える人もいる。なので、それぞれ個人によって量を調節すれば良いのではないかと考える。食パンは、どの人が何枚食べるのか、それによって各クラスの枚数を調節したら良いと思う。

二つ目は、時間があまりないことだ。準備や片付けなどもあるので、どうしても給食を食べる時間が短くなってしまふ。そうになると、十五分程度で給食を食べなければいけなくなり、食べきれない人や、増やそうと思ったけれど時間がなくなる人が出てくる。さらに一つ目の理由にもあった通り、量が多いとなおさらだ。これらのことから、より食べ残しが多くなってしまふのではないかと考えられる。給食の時間を、数分延ばすことで食品ロスが減る可能性があるかと、私は思う。

三つ目は、好き嫌いがあるということだ。好きなもの、嫌いなものがあるのは、仕方がない。でも、食べるきっかけを作らなければいけないと私は思う。例えば、いつも余ってしまう牛乳。牛乳は、牛の親

の血からできていて、本当は、子を育てるために大切な乳なのだが、私たちが飲んでいて、それなのにも関わらず、私たちは牛乳を捨ててしまっている。このことを知ったら、少しは「捨てるのはもったいないから飲んでみようかな」と、思い始める児童も出てくるかもしれない。肉や魚などの動物、野菜や果物といった植物の一つ一つに命があると思えば、嫌いな食べ物にも挑戦できるかもしれない。このように、学校で食べ物の命について話すことで、食べ残しをしないという意識が高まると思う。

四つ目は、三つ目の理由に似て、食べる人の気持ちだ。みんな、何も考えずにただ捨てている。でも、そこまでにどれだけの苦勞・時間・思いがあるのか分かっているのだろうか。私の祖父は畑をやっている。毎月大きなダンボールにたくさん採れた野菜をいれて、とても大事に、うれしそうに送ってくる。「毎日時間をかけて、しっかり管理しているんだな」と思うと、大変さが伝わってくるような気がする。中には、傷ついている物もある。しかし、スーパーの見た目がきれいな野菜より、ずっとおいしいと私は思う。私の祖父だけでなく、色々な生産者が一生懸命育てた野菜、思いのつまった畜産品を食品ロスとして捨てる。それが消費者が生産者に送るメッセージなのだろうか。食品ロスゼロは難しいと私は考える。しかし、消費者が生産者の思いも考え、

食品ロスを減らすという意識を持つことが、大切であると思う。

今開催されている東京オリンピック。閉会式で、四千食の弁当が廃棄されたと大きな問題として、取り上げられていた。世界では現在、「持続可能な開発目標」SDGsが、課題となっており、これに反する行為としてこの五輪で問題となった。また、二酸化炭素軽減のために電気自動車の開発を、トヨタやホンダ等が急いでいる。これからの世界、そして社会は、「環境」を守っていくことが大きなテーマであり、それがビジネスチャンスにもなるだろう。

今回、私が考えた食品ロスは小学生でも身近で、改善に向け考え、取り組める環境対策の一つだ。私は、この問題をみんなと共有し、できることから少しずつ、始めていきたいと思う。